

## ベルクソンにおける複数世界論の意義

濱田明日郎(京都大学/日本学術振興会特別研究員 DC1)

ベルクソン『創造的進化』(1907年、以下 EC)第三章において展開される複数世界論の哲学(史)的意義を検討すること、これが本発表の目標である。

「この宇宙にはこの世界以外にも生命が可能な世界がある」ことを論じる複数世界論は、西洋思想史に限っても、神学的な思弁及び天文学的な仮説として広く語られてきたものである。具体的な例を挙げるならば、クザヌス『学識ある無知について』はその先駆にしてひとつの精華であったと見ることができる。ベルクソンの EC において見出される複数世界論もまた、その結論だけを取り出すならば、これらの伝統を大きく逸脱するものではない。「おそらくすべての星に掛かっている suspendu 世界の全て」で、「生命は可能であるというのが真実である」(EC257)。ここで「世界」は、「濃縮の途中にある星雲」(EC249)から生まれる恒星系のことが念頭に置かれている。

さて、興味深い点は、従来の多くの複数世界論者と異なり、ベルクソンが「神の無限の力能の無限の表現」といった神の全能性を説明原理とした説明によらずに、しかも、自らの哲学説において初めて「神」の場所を与えつつ、複数世界論を述べる点である。

「至る所で同種の作用が遂行されている[……]とすれば、そこから巨大な花火の火花のように諸々の世界 mondes が湧出するところの一つの中心を私が語る時、私は単に十分あり得るこの[作用の]類似 similitude を表現しているにすぎない——とはいっても私がこの中心を事物として与えるのでなく、湧出の連続性として与える限りでのことだが。このように定義される神はすっかりなされた tout fait ものを何も持っていない。かかる神は、絶え間ない生命であり、作用であり、自由なのだ。このように考えられた創造は神秘ではない」(EC249、強調は原著者)。

この引用から既に明らかなように、EC の「神」はあくまで「世界」をなす作用の類似の表現として与えられるものなのであり、類似する世界を作るものとして措定された原理ではないことがわかる。であれば、ベルクソンはそもそも複数世界の存在とそれらの「類似」をどのように思考したのか。そしてなぜ「類似」なる観念を通して、その「中心」に「神」という名を与えるに至ったのだろうか——これが本発表を導く問いとなる。

本発表では、まず、テキストに内在的に、ベルクソンが複数世界論を展開することになった経緯を明らかにし、彼の哲学における複数世界論の意義を画定する作業を試みる。

ベルクソンが EC 第三章で定位しているのは「真の発生論」(EC154)の立場であり、ここでベルクソンは「神秘」(EC241,249)でないような「創造」によって、物質世界の発生を論じようとしている。ここでベルクソンは、神秘でない創造の具体例として詩の創作を挙げ(EC240-241)、これを「世界」の創造と重ねていくという、謎めいた論述を行うことになる。われわれは①「世界」の次元と②「宇宙」の次元という二つの次元をパラレルに論じていくベルクソンの記述を整理しつつ、①においては「世界」における(新たな形相の付加)、②においては「世界」そのものの(新たな形相及

び質料=物質の付加)という、次元を異にするが「不断に新しさが付加される」という点で一致する創造が語られていることを明らかにしよう。

ただし、ひとり「不断に新しさが付加される」というアナロジーのみから、物質世界の発生が語られているわけではない。彼の主張には、それを正当化する数多くの批判的論点が潜伏している。ここではとりわけ、「その全体性における宇宙 l'univers dans sa totalité」という言い方で与えられる全体概念と、諸々の世界の「集積 assemblage」(EC242)としての宇宙概念との対比に着目して考察を進めたい。前者の宇宙観が創造を「神秘」としてしまいう一方、後者の宇宙観は、諸世界を「比較的閉じた」ものに留め置き、熱力学第二法則の妥当性をその内部に限定するからこそ、宇宙において創造の余地をもたらし、「おそらく無際限に新たな諸世界の追加によって増大する」(ibid.)宇宙を可能にするのである。

こうして明らかになるベルクソンにおける複数世界論の内実を前提とし、本発表はさらに、その哲学史的な意義を画定する作業を試みる。ここでわれわれは、西洋思想史上に見られる複数世界論を簡単に整理区分する作業を行なったのち、これを特定のパースペクティブから論じた A.O.ラヴジョイ(1936)や A.コイレ(1957)などを思想史的な参照項として、新プラトン主義的なコスモロジーの諸相を比較項として置き、主に「無限の宇宙」の実在性という論点に着目しつつ、ベルクソンのコスモロジーとの連続性及び差異を検討することで、ベルクソンの複数世界論の特異性を明らかにしたい。

典型的には Waterlot(2008)など、EC 及び DS おける〈神〉に着目した研究は少なくないが、本発表ではこうしたいわば正面の問いに対して、その裏面を追うように〈世界〉の側に着目することで、ベルクソンのコスモロジーの成立を追跡し、結果として EC における「神」のありようを逆照射することになる。

## 参考文献

- Lovejoy, A. O. (1914). *Bergson, & Romantic Evolutionism: Two Lectures Delivered Before the Union September 5 & 12, 1913*. University of California Press.
- Lovejoy, A. O. (1936). *The great chain of being: A study of the history of an idea*. Harvard University Press. (邦訳:内藤健二訳(1975)『存在のたいなる連鎖』晶文社)
- Koyré, A. (1957). *From the closed world to the infinite universe*. The John Hopkins Press. (邦訳:野沢協訳(1999)『コスモスの崩壊—閉ざされた世界から無限の宇宙へ』白水社)
- Waterlot, G. (2008). Dieu est-il transcendant: Examen critique des objections du P. de Tonquédec adressées à l'auteur de L'Évolution créatrice. *Archives de Philosophie*, 2(2), 269-288. <https://doi.org/10.3917/aphi.712.0269>
- 杉山直樹(2006)『ベルクソン 聴診する経験論』創文社。
- 三宅岳史(2012)『ベルクソン 哲学と科学との対話』京都大学学術出版会。